

名馬たちのラストラン

文・島田明宏



第19話 レモンポップ
 騎手／坂井瑠星
 2024年12月1日
 第25回 チャンピオンズカップ(GI) 中京競馬場

近年充実著しい日本のダート界において、2023、24年と2年連続で最優秀ダートホースの座に就いた砂の王者。それがレモンポップである。

ラストランは24年12月1日のチャンピオンズカップ。その前月にそこでの引退と、翌25年から日高町のダーレー・ジャパン・スタリオンコンプレックスで種牡馬となることが発表された。後述するように、結果として、競馬の神様がこのときを選んだかのような「血のバトンタッチ」となった――。

レモンポップは18年2月15日、アメリカで生まれた。父は芝とダートのGI馬を複数送り出しているレモンドロ

ップキッド。母は未勝利のアンリーチャブル。母の父はアメリカで2度リーディングサイアーとなったジャイアンツコーズウェイ。

典型的なアメリカカ血統のこの馬は、キャリア18戦のすべてがダートであった。美浦に厩舎を構える田中博康の管理馬となり、戸崎圭太を背に20年11月の新馬戦、カトレアステークスを連勝。

脚部不安で3歳シーズンのほとんどを休養にあて、約1年ぶりの実戦となった夙川特別と、22年初戦の2勝クラスはクリスチャン・デムーロが騎乗し、ともに2着。本領を発揮するのは戸崎に手綱が戻った次走の2勝クラスから



伸ばし、2番手を2馬身以上突き放して独走態勢に入る。そのまま圧勝するかに見えたが、ラスト200mを切ったあたりで外からウィルソントソローが凄まじい脚で追い上げてきた。1完歩ごとに差が縮まり、逃げ込みをはかるレモンポップにウィルソントソローが鼻面を揃えたところがゴールだった。写真判定の結果、レモンポップが鼻差だけ前に出ていた。チャンピオンズカップ連覇は史上2頭目。2着ウィルソントソロー、3着ドゥラエレデと、1、3着が前年と同じだったのは平地のGIでは史上初のことだった。名馬のラストランに相応しい、印象的なレースになった。

「安定王者」ならではの数字である。ラストランから2週間も経たない12月13日、アメリカのレーンズエンドファームで繋養されていた父のレモンドロップキッドが世を去った。28歳だった。種牡馬は21年に引退していたが、最後の代表産駒が第2の馬生を始めるタイミングに合わせたかのような大往生であった。

2番人気は前走のJBCクラシックでJpnI初勝利をマークした前年の2着馬ウィルソントソロー、3番人気は同年のフェブラリーステークスの覇者ペプチドナイル、4番人気は芝でのオープン勝ちもある3歳馬サンライズジバングで、ここまでが単勝10倍以下だった。

ゲートが開いた。

レモンポップはメンバー中トップにも見えた速いスタートを切り、ハナに立った。すぐ外からペプチドナイルが来たかと思うと、その外からミトノオーが上がってきて、レモンポップの外に馬体を併せ、1、2コーナーを回って行く。

レモンポップが先頭のまま向正面へ。半馬身ほど遅れた外にミトノオー。レ

モンポップの直後にはクラウンプライド、その外にはペプチドナイルがつけ、ハギノアレグリアス、ペイシャエス、グロリアムンディらががつづく。怖いウィルソントソローはそれらの後ろの馬群のなかにいる。

3コーナー手前でも4分の3馬身ほど後ろからミトノオーに絡まれるような形のまま。同じ「逃げ」でも、早々に単騎先頭に持ち込むことのできた前年とはまったく違う展開になった。

しかし、その形で苦しくなったのは、レモンポップではなくミトノオーのほうだった。レモンポップは、3、4コーナーを回りながら後ろをじわじわ離して1馬身半ほど抜け出し、最後の直線へ。坂井が手綱をしごくときさらに末脚を

全身全霊をこめた愛馬の走りに、田中は、騎手時代を含めて初めて涙を流した。

通算18戦13勝、2着3回、着外2回。国内では16戦13勝、2着2回という無双ぶり。海外で結果が出なかったのは、環境の変化への適応などメンタル面が影響したのだから。

18戦のうち16戦で1番人気になり、うち11戦が1倍台。日本のダート界の

レモンポップ引退式